

欧米における日本マンガ受容の新たな展開 —— 少女マンガブームをめぐって ——

松 居 竜 五*

A Research on the reception of Japanese manga in Europe and America, focusing on the popularity of Shoujo

Ryugo Matsui*

Shoujo is a style of Japanese comics for girls and young women in their teens, which developed in the postwar period. This style, often thought to be a very peculiar one even in Japan, is now gaining popularity in the US and Europe. This paper analyzes why such a genre attracts the mind of many readers in the West and who the first generation creators of it are. It will reveal that the female teens did not have their own voice in popular culture and those who belong to the minority group are particularly interested in this genre imported from a foreign country.

1 欧米圏における“Shoujo”ブーム

ここ数年、ヨーロッパとアメリカで日本の少女漫画がブームとなっている。

以前から、少年マンガについては、アジア各国と同様、欧米でも1970年代のロボットものに始まり、日本で生み出される作品群が子供向け娯楽の世界を席卷してきた。1980年代後半の大友克宏『アキラ』の成功以降は、アニメとあいまって青年層にも受容を広げており、最近では、アクション、スポーツだけでなく、さまざまな分野の日本マンガ・アニメが欧米を含む世界中で翻訳・上映されている。1990年代からは、日本の大衆文化の世界進出が一気に進んだが、その中心にあるのはつねにマンガとアニメであった。

そうした流れから言えば、少女マンガが欧米圏で受け入れられることも、それほど驚きではないように思われるかもしれない。しかし、アクションやスピード感といった「普遍的」な要素が中心となる少年ものと比べて、少女ものは学園生活や恋愛といった、より地域文化に密着した特殊な要素がつよい。日本国内ですら、大きな瞳や花や星の背景が特徴的な少女マンガは、大人になりきれない時期の少女特有の閉じた世界のものであり、いい大人が読むものではないという先入観が長く支配してきた。そうした、一見内向きで特殊と見える分野が、言葉と文化の壁を越えて、今なぜ欧米圏に広がろうとしているのか。本稿では、この2005年現在における最新の文化現象について、できるかぎり現状を把握しつつ、分析を加えることにしてみたい。

まず、shoujo という用語をめぐって。この言葉は、現在アメリカを中心とした英語圏において、

* 龍谷大学国際文化学部

少女マンガを意味する外来語として認知されつつあるようだ。言うまでもなく、これは日本語の「少女」から来た言葉なのだが、英語においては、少女マンガあるいは少女アニメという意味で限定的に用いられている点特徴的である。たとえば、ウェブ上のオープンな百科事典として影響力を持ちつつあるウィキペディアの英語版では、shōjo の見出しが存在するが、その冒頭は以下のようになっている。

ショウジョ（少女、字義的には若い女性の意）とは、西洋での用法として、少女向けのアニメ、マンガのスタイルのことである（ある程度は少年にも性別を越えて受け入れられている）。

Shōjo or shoujo (少女 lit. *young woman*) is, in western usage, a style of anime and manga intended for girls (that may have some crossover appeal to boys as well).

(wikipedia, http://en.wikipedia.org/wiki/Main_Page 2005)

「西洋の用法として」という説明があるから、日本の「少女」という言葉とはちがう意味範囲で用いていることに自覚的であることがわかる。ちなみに他のヨーロッパ言語によるウィキペディアでは、ドイツ語版・イタリア語版・スペイン語版で shōjo を採用している。shōjo manga を採用しているフランス語版のような例外はあるものの、この限定的な使い方が欧米圏ではすでに認知されたと言ってよいだろう。一方、shōjo と shoujo のどちらの表記に定まるかは、まだはっきりしないが、調査した範囲ではウィキペディアのように shōjo の表記を取っているものは少なく、shoujo が優勢なようである。ただし、少年ジャンプのアメリカ版を発行してきた大手のヴィズ・メディア社 VIZ Media が、2005年7月にアメリカで初めての少女マンガ雑誌 *Shojo Beat*（集英社、白泉社、小学館などの作品を掲載、図1）を創刊したので、今後は長母音記号を省略した shoujo という表記が増えてくることも考えられるであろう。

いずれにせよ、以上のように英語圏での shōjo, shoujo, shoujo は、すべて実質的に「少女マンガ」を意味しているので、ここからは本稿の訳文でもすべて少女マンガと置き換えることにしたい。

こうしたアメリカでの少女マンガの普及を支えているのは、言うまでもなくまず第一に日本の作品の翻訳である。以前は通信販売やコミック専門店のアメリカン・コミックスの一部分に紛れ込んでいただけの日本マンガの翻訳は、最近では大手の出版社から書店の流通に乗せられるようになって



図1

た。伝統的にアメリカのコミックは、連載1～3回分程度の話を収録したA5版の薄手の冊子で提供されていたが、それが連載10回分程度の量を掲載した日本式のB6版のしっかりした単行本に移行しつつある。このことは、とりわけ少女・女性読者の獲得という点で大きな役割を果たしたと思われる。

共同通信アメリカ Kyodo America は、2005年9月4日付けで「日本のマンガ・アニメがアメリカで女性読者を増やす」Japanese comics and animation enjoy growing female audience in U.S. という記事を配信しているが、その中には次のようなレポートがある。

以前はアメリカで発売されるアニメ・マンガは男性をターゲットにしたものがほとんどだった。

しかしそれが今は徐々に女性にシフトしてきている。コミックスはコミックス専門店で買うものというイメージが、マンガが一般書店にも流通するようになって変わったことも女性読者獲得の大きな要因になった。

「一般書店にマンガが置かれるようになってから買うのがとっても簡単になったと思う。(コミックス専門店の) 居心地の悪さは無いし、種類も沢山あるし」こう語るのはテキサスに住む35歳のIT技術者でアマチュアマンガ作家のステファニー・フォルス。

The expanded distribution of Japanese comics and animation in the U.S. has been an important factor in attracting a broader female audience.

In particular, manga has emerged from obscure comic shops to the shelves of mainstream American bookstores.

"Once the distributors hit the bookstores, it was easier to buy manga without feeling out of place in the store, and you had a wider selection," said Stephanie Folse, 35, an information technology librarian and amateur manga artist from Fort Worth, Texas. (Kyodo America, 2005)

この記事はまた、2005年の第三四半期の全米マンガ売り上げトップ50のうち、四分の一が少女マンガによって占められているとしている。前述の少女マンガ専門雑誌の『少女ビート』の創刊も一つの起爆剤になると考えられ、2005年現在、アメリカにおける少女マンガのブームはとどまるところなく拡大しているように見える。

2 なぜ少女マンガなのか

こうしたアメリカの少女マンガの流行の中で、一つ注目されるのは、マンガが読む文化としてだけでなく、描く文化として認知されている点である。日本マンガが大手の流通網に進出するかなり前から、アメリカでは "How to Draw" と称するマンガの描き方についての本がたくさん出されていた。その中でも、少女マンガの描き方は人気のあるジャンルのようで、"How to Draw Shoujo" と銘打ったタイトルをいくつも見つけることができる。たとえば、2003年に出版されたアカスタとクリパトリックによる『少女マンガの描き方』How to draw shoujo はその一つであるが、冒頭で少女マンガというジャンルについて次のように紹介している。

では、少女マンガとはいったい何なのか？ 少女マンガは、日本のマンガの中で、特に六歳か

ら十八歳までの女の子と女性を対象とする形式のことである。このジャンルは、マンガの生産の中でも驚くほど大きな割合を占めていて、日本で毎年印刷されるコミックのうちの15パーセントから35パーセントにもなる。実は、少女という言葉は、字義的には「女の子」を意味する。今のアメリカに流通しているアニメやマンガは、たいてい少年（男の子）アニメであるが、少女ものは急速に普及しつつある。

So, what exactly is shoujo? Shoujo is a style of Japanese manga specifically directed at girls and women from ages six to eighteen. The genre makes up a surprisingly large percentage of manga produced, accounting for between fifteen and thirty-five percent of the comics printed in Japan yearly. Actually, the word "shoujo" literally means "girl". The anime and manga most common in the U.S. are typically shounen (boy) anime, but shoujo is gaining recognition every day. (Robert Acosta and Paul Klipatrick, *How to draw shoujo*, 2003, Antarctic Press Production, Introduction)

さらに、少女マンガの画としての特徴について、この本は以下のように続けている。

少女マンガの絵はユニークな特徴をもっている。表面上は、少女マンガはたいていかわいく、きれいでくっきりとした描線を使い、緻密な背景を使うか、もしくは無背景である。主人公は女の子の場合がほとんどで、大きな目や、たいへん縦長になった身体、誇張された表情をしている。物語の中の女性は、年齢に関係なく、実際の外見とはちがう描線で描かれる。

Shoujo art has certain characteristics that make it unique. On the surface, shoujo is usually pretty and uses clean, defined, curving lines and detailed backgrounds or absolutely no backgrounds at all. The main characters of the story tend to be female, drawn with large eyes, really elongated bodies and exaggerated features. Females in the story, regardless of age, have no real curves to their physiques.

アコスタとクリパトリックの『少女マンガの描き方』では、この後、ペンやブラシ、トーンといった道具の説明から、デッサンの仕方、遠近法の使い方、表情の付け方の解説がなされている。この本を出したアンタークティック出版 Antarctic Pressは、これまでも雑誌『マンガジン』*Mangazine*の発行など、日本マンガの紹介とアメリカ人作家による日本風マンガの創作をおこなってきた会社であり、そうした延長線上にこのような紹介がなされている。

一方、ストーリーとしての少女マンガの特徴については、同様のハウツーものである2003年刊行のクリストファー・ハートの『マンガマニア少女』が次のように紹介している。

他のマンガの形式が、戦闘や戦いの場面に焦点を当てているのに対して、少女マンガは人間関係や冒険に主眼を置くものである。もちろん、少女マンガにもエキサイティングなアクションシーンはある、特に、人気のある魔法少女ものには多い。しかし、そのような場合でも、登場人物は等身大のティーン・エイジャーが持つような問題を抱えた等身大の人物として描かれる。

And while many other styles of manga focus on battles and fight scenes, the shoujo genre

concentrates on relationships and adventure. To be sure, there are exciting action scenes in shoujo, especially in the popular Magical Girl subgenre, but even with that, the characters are drawn as real people with real problems that teenagers relate to. (Christopher Hart, *Manga Mania Shoujo*, 2000)

この文章の中の、少女マンガは「等身大の人物」であるという言葉は、とりわけ重要であろう。これこそが、文化的背景が異なる日本の少女マンガが、米国の少女に受け入れられている大きな理由と考えられるからである。日本マンガの輸入は、これまで少年を中心にしており、少女マンガは売れる要素としては考えられてこなかった。たとえば、日本アニメの成功について報告したニューヨーク・タイムズ2002年1月20日のコンシダイン記者による報告は、そうした米国での受容の偏りについて次のように書いている。

日本では、ちょうどマンガ本が少女マンガか少年マンガかのどちらかで売られるように、アニメーションの中には少女向けのものもあれば少年向けのものもあるということが認められている。しかし、米国では、少女向けの漫画アニメーションは女々しい材料と見なされていて、放映あるいは配給をめぐる困難な戦いに直面する。「セーラームーン」が、少年たちがその姉妹と同じくらい熱心に見ていると気づかれるまで、合衆国では成功しそうにないと考えられていたことを想起しなければならない。

In Japan, it's accepted that some cartoons are for girls and others are for boys, just as comic books are sold either as girls' comics (shojou manga) or boys' (shonen manga). But in America, a girl's cartoon is considered sissy stuff, and faces a difficult fight for broadcast or distribution. It's worth remembering that "Sailor Moon" was considered unlikely to succeed in the United States until it was noted that boys watched it as avidly as their sisters. (J. D. CONSIDINE, *NYT*, 20 Jan, 2002)

ここでコンシダイン記者が、少女向けの作品の従来のとらえ方について「女々しい sissy」という言葉を用いていることは象徴的である。日本マンガだけでなく、伝統的なアメリカン・コミックスや映画なども含めて、米国の大衆娯楽作品は男性中心的な部分を持つ。実はそこにこそ、少女マンガが、現在のアメリカで十代の女性から圧倒的な支持を受けつつある理由があるのではないだろうか。そもそも、米国においては、少女は大衆娯楽の世界の主体として考えられてこなかったのである。そうだとすれば、実はアメリカの娯楽産業からはじかれていた十代の少女という未知の領域の社会層が、マンガという表現手段を獲得しようとしていることの意味には、過小評価できないところがあるのではないだろうか。

3 少女マンガを支える読み手と作り手のサイクル

では、なぜ日本の少女マンガは、そんなにも十代の少女にアピールする作品を生み出すことができるようになったのか。

その大きな理由は、日本における少女マンガの描き手の多くが、女性だということにある。マン

が一般に言えることだが、日本の場合には巨大なマーケットの中で次々に作品が生み出されて、それが読者によって選別され、淘汰されていく。そして、そうやってマンガ作品の海の中で育ち、影響を受け、マンガに対する厳しい目、すなわち一種のリテラリー・テイストを培ってきた読者自身が、今度は作家や編集者として作品を生み出す側に回ることで、こうしたマンガをめぐる需要と供給のサイクルが完成される。

日本の少女マンガにおいては、こうしたサイクルの中で、ついこの間まで読者であった女性作家が、みずからの体験や夢をリアルに描き込むことで、十代の女の子が日常的に感ずる問題を、身体感覚そのままに映し出すような作品が生み出すことが可能になっているのである。早くから日本マンガに注目して本格的な研究をおこなってきたフレデリック・ショットは、そうした日本の少女マンガの世界における作者と読者のサイクルの重要性を次のように指摘している。

1940年代と1950年代に、合衆国ではフラミンゴ・ラヴ、ロマンティック・スリル、ティーン・エイジ・シークレットといった女の子向けのコミック本が出版された。これらはすべて男性作家によるもので、すぐに飽きられてしまった。今日人気があるワンダーウーマンなどのコミックは、男性的スーパーヒーローものの延長でしかなく、読者も若い男性である。メキシコやフィリピンでは、恋愛コミックはまださかんであるものの、その流通は限られていて、作家たちはやはり男性である。

しかし、日本では、少女マンガという名前の女の子向けの週刊、隔週刊、月刊のコミック雑誌が毎月平均で四十五冊も売店に並んでいる。部数が百万部を越えるものも多い。それらは男の子向けの雑誌と同じように分厚く、それぞれの物語は長い間連載された後に、単行本としてまとめられて販売される。そして、起用される作家は圧倒的に女性が多く、物語の中心は勇気でも忍耐でも、アクションでもない。力点は、もっと受け身の、心の中の夢の世界と、人間関係についてのはてしない熟考にあり、それぞれにふさわしいと思われる視覚的なスタイルが用いられている。

In the 1940s and 1950s in the United States there were comic books for girls with titles like *Flaming Love*, *Romantic Thrills*, and *Teenage Diary Secrets*. They were all created by men, and all were short-lived. Comics like *Wonder Woman* popular today are an extension of the male superhero phenomenon, and most of their readers are young boys. In Mexico and the Philippines, where romance comics are still popular, circulations are limited, and the artists, again, are men.

But in an average month in Japan around forty-five different titles of weekly, biweekly, and monthly girls' comic magazines—called *shojo manga*—appear on the newsstand. Many have circulations over a million. Like the boys' comic magazines, they are massive, with long serialized stories that are later compiled and sold as series of paperbacks. Yet the artists featured are overwhelmingly women, and their stories emphasize neither bravery, perseverance, nor action. They stress a more passive, inner world of dreams and endless musings about human relationships, and they employ an appropriately different visual style. (Frederik L. Schodt, *The World of Japanese Comics*, 1983, p88)

しかし、こうした女性作家による、過去の自分に向けたメッセージとも言える作品が描かれるためには、マンガめぐる流通の中で、読者から作者へというサイクルが完結される必要がある。はたしてアメリカにおいて、近い将来そのようなことが起こりうるのだろうか。

その答えは、アメリカよりも早い時期に日本の少女マンガを受容した国を見てみれば、導き出すことができる。まず筆頭として挙げられるのは韓国である。韓国では、1970年代に『キャンディ・キャンディ』や『ベルサイユのばら』などの日本の少女マンガが流入した結果、文化的な親近度もあって、自前の女流漫画家が多数輩出することとなった。そして2000年現在、隔週刊で三冊、月刊で六冊出されている少女向け漫画雑誌のほとんどの作品を、韓国人作家が執筆するという盛況を迎えることとなった（松居「日韓サブカルチャー交流の現在」『韓国と日本——比較文化史的考察』、2000年）。それらはほぼすべて、日本の少女マンガの技術を基盤にしたものである。層の厚い日本への逆輸入はまだ限定的であるが、層の薄い欧米には日本マンガに混じってすでに韓国製マンガの輸出が進められている。

こうした韓国の少女マンガの歴史の中からは、日本マンガの様式からはみだして、韓国独自の美的表現を取り入れたり、韓国社会の現実を鋭くえぐるような作品も生まれてきた。たとえば、ジョン・スヒョンのように、中世の朝鮮半島の世界を再現する『飛龍伝説』のような作品もある。また、ファン・ミナによれば、彼女の作品は1970年代から80年代の軍事独裁政権下で弾圧を受けながら、表現の自由を模索してきたという。彼女を中心とする九人の女性作家が、一時期同人誌『ナイン』を発行して、創作を継続してきたことなども重要であろう。ファン・ミナは、『李さん家の家族』では、日本のマンガ雑誌に現代韓国人の家族の肖像を異文化紹介的に描くという試みに挑戦し、日本人読者を多く獲得することにも成功している。

このようにすでに女性作家の創作活動が定着している韓国ほどではないが、アメリカよりは先行している例としては、フランスの場合が挙げられる。フランスでは、伝統的な絵と文章によるバンド・デシネと呼ばれるジャンルに取って代わって日本のマンガが1990年代に流入したのだが、その中には少女マンガも多く含まれており、読者の支持を受けていることが見て取れる。そして、2004年には日本の少女マンガの翻訳が連載を中心とする女の子用の雑誌『マグノリア』Magnolia が刊行されることとなった。現在二年目を迎えて通算20冊ほどが出版されたこの『マグノリア』は、日本文化の一般的な紹介が豊富なことでも注目されるものだが、少女マンガの書き手を積極的に養成しようとしている点も特徴的である。

『マグノリア』の読者投稿欄を見ると、日本の少女マンガの翻訳に触れたフランスの女の子が、みずからその絵を模写して送ってきているものが目につく（図2）。少女マンガへの愛情を語るメッセージが並ぶ投稿欄は同時に、アマチュアの少女たちが模写や創作の腕を競うスペースでもある。『マグノリア』の場合には、ハイティーンから二十歳以上の比較的高い年齢層の読者からの投稿が目立ち、少女マンガが「子供向け」の娯楽としてだけではなく、幅広い階層の表現のメディアとなりつつあることを感じさせる。そして彼女たちの中には、将来フランス人少女マンガ家として、作り手の側に回る人たちも少なくないのではないだろうか。実際、『マグノリア』では、時折、"Nouveaux-talents, Wanted"と題して、マンガを描くための技術を指導しているページが掲載されている。「求む、新人」という題はおそらく誇張ではなく、同誌は日本人作家の翻訳のみではなく、フランス人女性マンガ家を真剣に発掘したいと考えていると思われる。

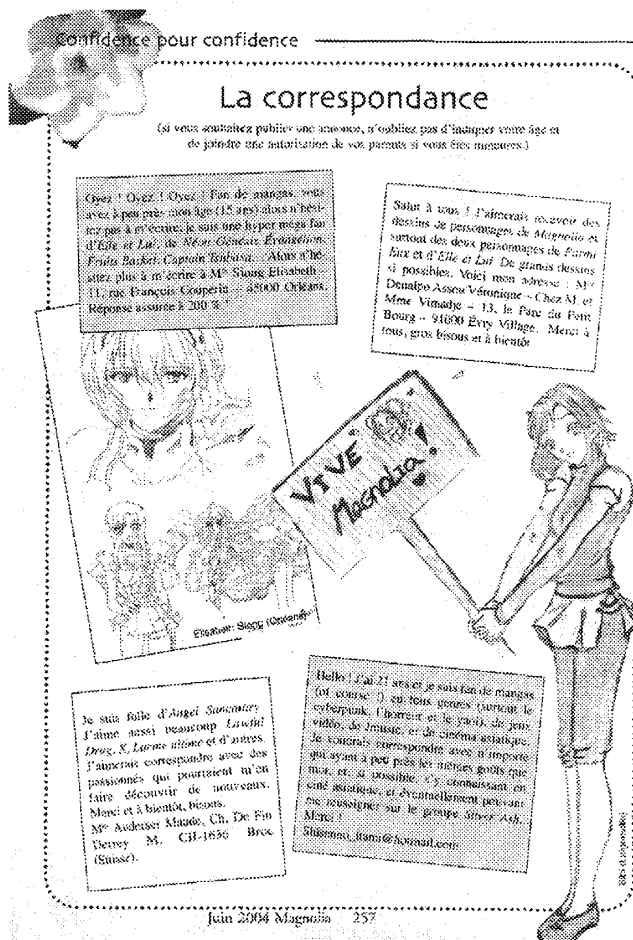


图 2

傑作を作り出すことが可能なのです。

After reading hundreds of pages of *Shojo Beat*, we bet that the last thing you're lacking right now is inspiration. Why not create your own manga for everyone to admire? It's easier to do than you think, and we're here to show you -- even if you've never put brush to paper in your life. Starting with this issue, we'll be running a series of manga drawing lessons. We'll show you the tools you need and how to use them -- add your imagination, patience, and a bit of practice, and you'll be creating your own masterpiece in no time. (*Shojo Beat*, August, 2005, p.263)

こうした講座の延長線上には、コンテストや投稿原稿の持ち込みといったかたちでの自前の作家の登場の機会設定が考えられる。韓国の少女マンガ雑誌のように、『マグノリア』や『少女ビート』からフランス人少女マンガ作家、アメリカ人少女マンガ家作家が生まれる日は、実はそんなに遠くのことではないのではないだろうか。スポーツやアクションといった「普遍的」な題材の多い少年マンガと異なり、少女マンガの対象は学園生活から地域コミュニティ、歴史といったローカルで個別の文脈に密着したものが多く、そのために固有の作家が活躍する余地も広いと考えられるのである。

こうしたフランスの状況は、後発のアメリカの雑誌でも踏襲されている。『少女ビート』は2005年8月の創刊第二号に『森崎法美の新実践漫画テクニック』の英訳版を "How to draw manga: Lesson one" として掲載し、マンガの描き方講座をスタートさせた。この講座は、冒頭で次のように読者にマンガを描くことを進めている。

『少女ビート』を何百ページも読んだ後で、あなたが今すぐ必要としているのはインスピレーションでしょう。あなた自身のマンガを描いて、みんなの称賛を得たいとは思いませんか？それは、あなたが考えているよりずっと簡単なことです。もしこれまで一度も筆で紙に描いたことがないとしても、ここでやってみましょう。今週号から、マンガの描き方の講座を連載します。まずは必要な道具と、それをどう使うかです。それにあなたの想像力と、忍耐と、少しの練習を加えれば、すぐにあなた自身の

4 現代アメリカの少女マンガの担い手たち

そうした本格的な創作先駆けとして、現代のアメリカにおいてオリジナルな作品を発表している作家たちについて少し紹介してみよう。

まず、前述の『マンガマニア少女』を執筆したハートは、器用な人物らしく、『マンガの描き方』、『伝統的コミック・キャラクターの描き方』、さらには『妖精画の描き方』といったさまざまなハウツーものの著書が目につく。しかし、その意味では日本マンガの読者であった世代ではなく、『マンガマニア少女』にしても、表紙や目立つ部分の絵では日本の少女マンガを真似てはいるが、ページを読み進めるとむしろ伝統的なアメリカン・コミックの人物の描き方が彼のベースであることがわかる。

それに対して、ややマイナーな雑誌『マンガファイル』*Mangaphile*に『トビアス、私の姉』*Tobias, Watashi no Ane*を連載しているジェシカ・モフェット Jessica Moffett の場合は、絵を一目見ただけで、どっぷりと日本の少女マンガの世界にひたっている世代であることが見て取れる(図3)。



図3 © Jessica Moffett

「最初にマンガの絵を目にしたときは、強い衝撃を受けました」とジェシカ・モフェットは語る。彼女はボーズマンのモンタナ州立大学の修士課程で美術を学ぶ学生である。「マンガはシンプルだけれども、中身が濃くて表現が豊かなのです」

"The first time I saw the art of manga, I was blown away," said Jessica Moffett, who is working toward a master's of Fine Arts degree at Montana State University in Bozeman. "Manga is so simple yet so intense and expressive." ("Navajo artist makes manga," *Indian Country Today*, May 6, 2004)

実は、モフェットは、アメリカ先住民のナヴァホ族の出身で、この連載作品でも、作品の一部にそうしたマイノリティの歴史を思わせる話を取り入れている。モフェットにとって、日本のマンガとは、みずからのアイデンティティを表現する手段としてとらえられているのである。

アメリカの主流なコミック本は、若い男性というただ一種類の読者に向けて描かれています。それに対して、日本のコミック本は、年齢、職業、性別を問わず幅広く受け入れられています。

Unlike American mainstream comic books created for mainly one audience—young males—comic books in Japan are popular among all age groups, occupations and genders."(ibid)

モフェットの作品がネイティヴ・アメリカンという視点からアメリカの社会を描く際の枠組みとして、少女マンガを用いることは大きな可能性を持っている。韓国の女性作家が日本の少女マンガの技法を用いて独自の社会的問題にアプローチしてきたことを考えれば、少女マンガが小説や詩のジャンルなどが持ってきたような一つの表現手段として機能することは明らかだからである。特に、アメリカ社会の主流ではないマイノリティとしての表現をおこなう場合に、同様に文化的にはマージナルな存在から大きな影響力を持ちつつある少女マンガのスタイルを用いることは、興味深い試みであると言えるだろう。筆者がE-Mailでコンタクトを取ったところ、モフェットは今後、日本でマンガの勉強をしたいということであった。

マンガ作家ではないが、日本の少女マンガの傑作『セーラームーン』に影響を受けた人物として、ファン・フィクション・ライターのライアン・センター Lianne Sentar がいる。センターは、セーラームーンのノベル版をトーキョー・ポップ社 Tokyo Pop から出版しているプロの女性作家だが、同時にみずからのウェブサイト <http://www.liannesentar.com/> で、セーラームーンのキャラクターを使った別のストーリー、ファン・フィクションを提供し続けている。13歳の頃から自分で小説を書いていた彼女は、17歳の時にセーラームーンの最初のファン・フィクションを執筆し、25歳の現在にいたるまで次々と作品を発表、オンライン公開している。

実は、センターは地中海（おそらくマグレブ）からの移民の子孫で、イスラム教徒であることを公表している。彼女のサイトには、おびただしい数のセーラームーン関連のノベル版、ファン・フィクションに混じって、2001年の9・11テロ以降のアメリカにおいて顕著なイスラム教への敵視に対する融和的なメッセージが含まれている。ウェブサイトを見るかぎり、彼女自身は、日本のマンガ・アニメへの傾倒と、イスラム教徒というアメリカ社会のマイノリティであることを関連づけた発言はしていない。しかし、マイノリティであるからこそ、マージナルな媒体に対していち早く感受性を示しているのではないかということ、モフェットの例などと比較して、感じさせるところがある。

このように、モフェットやセンターといったアメリカ少女マンガの最初の担い手の世代に、社会的なマイノリティの視線が含まれていることは、おそらく偶然ではないだろう。これは、読み手と書き手の巨大なサイクルとして機能している日本の少女マンガの現状とはまたちがった角度から、この媒体が持つ可能性に光を当てる結果となっているのではないだろうか。

『少女ビート』のような商業誌の成立からは、アメリカでも近い将来、日本と同じようなかたちの少女マンガ文化の発展が予想される。しかし、それは単なる日本の現象の再生産ではなく、アメリカ社会の中で、これまでの大衆娯楽のありかたにもどかしさと疎外感を感じていた少女たちが、みずからの表現媒体を獲得することにつながるはずである。小説や散文詩、オペラ、映画、といった過去の芸術媒体は、他の文化圏にその方法が伝わることによって、多くの人々に声を与え、多様な文化活動の展開を可能にしてきた歴史を持つ。少女マンガは、まさにそうした芸術媒体の最先端の部分として、現在進行形で、日本から世界へと伝播しつつあると思われるのである。